

（３）儒学を中心とした里づくり

１）ストーリー

江戸時代中期、後多久 4 代領主多久茂文は東の原に多久聖廟、東原庠舎を創建し、多久領を文教の里として形成しようとした。孔子の教えである儒学を教授した東原庠舎では武家の子弟のみならず庶民も学び、漢文学なども盛んであった。のちにここから近世、近代日本をリードする多くの人材を輩出した。孔子を祀る多久聖廟の祭礼である枳菜は、現在も受け継がれており、多くの老若男女が参加している。また、孔子に関する学校行事や祭りが開催され、歴史公園や歴史散歩道などの整備事業も行われてきた。多久学を始めとするその後の動きから聖廟は多久の象徴となり、観光拠点ともなっている。

２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

構成項目	主な文化財等	周辺環境	担い手
聖廟と孔子	国】多久聖廟 国】聖龕 市】青銅造孔子像 聖廟周辺区域 聖廟展示館	多久町東の原	多久市 観光協会 多久美化クラブ
	県】聖廟春季及び秋季枳菜 孔子祭り（枳菜） 聖廟お火焚き 孔子の里紅葉祭り	多久町東の原	学校関係者 枳菜委員会 観光協会
	伝説多久聖廟と龍	語りの場	伝説の語り部
教育の拠点づくり	国登録】多久市西溪公園寒鶯亭 市】石製先家君自安先生墓誌 東原庠舎跡 多久市立東原庠舎西溪校 東原庠舎（宿泊研修施設）	多久町東の原 多久町西の原 多久市郷土資料館	多久市 保管者 学校関係者 公益財団法人 「孔子の里」
聖廟と教育の統合	文廟記 多久市物産館「朋来庵」 多久市郷土資料館 歴史散歩道（聖堂大路）	多久町東の原 多久町西の原	多久市
	論語カルタ大会	市内 3 つの義務教育学校	学校関係者

国】：国指定文化財 国登録】国登録有形文化財 市】：市指定文化財

３）現況と課題

【担い手】

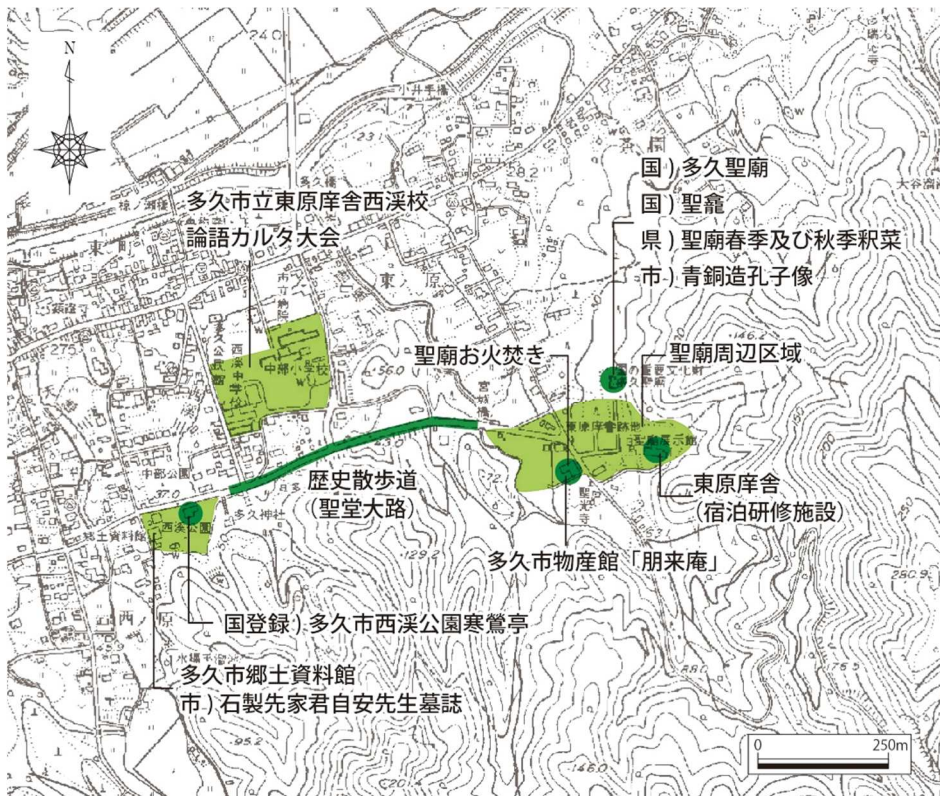
多久市が中心となっており、さらに、外部資金の受皿として平成 2 年財団法人「孔子の里」（後、公益財団法人）が設立された。また、学校の関係者も孔子の教えを引き継いでおり、行事などの重要な担い手となっている。

【公開と情報発信・整備状況】

国と県の補助金を受けて多久聖廟の大改修（昭和 62 年～平成 2 年）を行い、聖廟周辺を歴史公園とする丹邱の里整備事業（昭和 63 年～平成 3 年）などが進められた。市内の主要な道路には聖廟へのアクセスと距離を示した標識が立ち、市のホームページにも、聖廟関連の情報は掲載されている。

この中で、東原庠舎の名をもつ宿泊研修施設が設立され、多久市立の 3 つの義務教育学校にもこの由緒ある名前が継承されている。また、孔子の生まれ故郷の中国・曲阜市との提携・交流を進めている。

まとまった関連文化財群を示しているが、より適切な情報公開や文化財整備が求められる。



資料 5-6 儒学を中心とした里づくり 関連文化財群の分布



写真 5-20 聖龕



写真 5-21 青銅造孔子像



写真 5-22 多久聖廟



写真 5-23 釈菜



写真 5-24
石製先家君自安先生墓誌



写真 5-25 西溪公園寒鶯亭



写真 5-26 西溪公園



写真 5-27 歴史散歩道



写真 5-28
多久市物産館「朋来庵」



写真 5-29 東原庵舎学制



写真 5-30 東原庵舎（宿泊研修施設）



写真 5-31 多久市立東原庵舎西溪校



写真 5-32 論語カルタ大会

(4) 旧往還の沿道景観

1) ストーリー

古代の官道から発展し、江戸時代には宿・駅が設置され整備された唐津往還、伊万里往還の沿道には、歴史的な民家を中心とした特徴のある景観を形成している。

二つの道は、佐賀と唐津、伊万里を結ぶ古代の官道から近世の往還（唐津往還、伊万里往還）へと発展し、さらに現在の国道、県道の基ともなっている。人とモノが往来する道、朝鮮出兵のための肥前名護屋城へ至る大軍が移動した道、現代にもつながる歴史的な道の沿道には、くど造り民家※とその周囲の農地、商家が集合して並び建ち、独特の景観を形成している。

※くど造り：曲屋（まがりや）の民家、上から見るとコの字状でくど（かまど）に似ていることから名付けられた。佐賀平野独特の民家建築様式。

2) 構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

構成項目	主な文化財等	周辺環境	担い手
旧往還	唐津往還・伊万里往還	谷道 峠道 農地や山林 宿場町 武家屋敷	国 県 所有者 管理者
	女山の女盗賊伝説	山間部	伝説の語り部
沿道民家	国】川打家住宅（くど造り民家） 市】森家住宅（くど造り民家）	農村部 往還沿道	所有者 管理者
	国登録】木下家住宅（商家）	往還沿道	所有者 管理者
	東多久町民家群 北多久町商家群 西多久町民家群	往還沿道	所有者 管理者
沿道施設	多久市ふるさと情報館「幡船の里」 小侍番所跡	農村部 往還沿道	多久市 所有者 管理者
	堂 石造物（記念碑、道標など） 道祖元徒缸（ところ：とびいし）	往還沿道 農地 牛津川	所有者
	宝満山公園	農地	多久市

国】国指定文化財 国登録】国登録有形文化財 市】市指定文化財

3) 現況と課題

【担い手】

国・県・市、民家・農地等の所有者・管理者等である。

【公開と情報発信・整備状況】

指定文化財の川打家、森家は公開されているが、登録文化財の木下家住宅や他の民家は公開されていない。

多久市のふるさと情報館「幡船の里」では、所在している西多久町の情報パンレットを置き、地元で採れた農産物などを販売している。また近年空き家の増加が取りざたされる一方で店舗などへの一部利用も僅かながらみられる状況である。



写真 5-33 往還沿いの曲屋農家（西多久町）
「九州のかたち民家 草葺きの家を中心に」
（昭和 52 年発行）より



資料 5-7 旧往還の沿道景観関連文化財群の分布



写真 5-34 川打家住宅



写真 5-35 森家住宅



写真 5-36 木下家住宅 主屋



写真 5-37 北多久町多久原の商家



写真 5-38 北多久町多久原の商家群



写真 5-39 野間口の堂 (西多久町)



写真 5-40 多久市ふるさと情報館
「幡船の里」



写真 5-41 西多久町宿の民家群



写真 5-42 道祖元徒缸
(とこう : とびいし)

（５）炭都・多久

１）ストーリー

多久の石炭採掘は、江戸末期に始まったとされる。それから昭和 40 年代まで採掘が行われ、一時は県内における一大産炭地となった。掘り出された石炭は当初は牛津川を用いた川舟輸送が行われ、明治 32 年の筋原駅（現多久駅）の設置から鉄道（現 JR 唐津線）で運搬された。豊富な産炭量から「炭都・多久」と言われたが、石油へのエネルギー転換後は閉山が相次ぎ、昭和 47 年にはすべての炭鉱は幕を閉じた。

江戸時代には自家用の燃料や、農民の副業として石炭が採取されてきたが、明治期には小資本の会社が採掘を担い、大正時代になると大資本による会社が進出して本格的な産炭地となり、昭和期には多久の一大産業となった。石炭産業に関わる人も増加し、町は賑わいをみせ、山笠や盆綱引きなど、祭りも行われるようになったが、閉山後人口は減少に転じた。

炭鉱関連の遺跡そのものは多くは残っていないが、鉄道・道路区画整理などの町の骨格や住宅地が整備されたことで関連した地名も残り、近代の多久の歴史に大きな貢献を果たした。

２）構成している主な文化財とその周辺環境・担い手

構成項目	主な文化財等	周辺環境	担い手
炭鉱の跡	竪坑跡（竪坑櫓等） 坑口跡・ボタ山・ホッパー跡 炭鉱関連資料	東多久町別府 北多久町砂原 多久市資料館など	土地所有者 多久市郷土資料館
炭鉱関連遺産	真宗寺（各地から就労した炭鉱労働者が門徒衆になった） まちづくり（鉄道、関連道路、炭鉱住宅跡、他） 地名（明治佐賀など） 多久山笠・盆綱引き	寺院立地環境 現 JR 唐津線 東多久町 多久町 北多久町多久駅 周辺	寺院所有者と檀家 JR 九州 多久市 土地所有者 祭主催者

国】国指定文化財 県】県指定文化財

３）現況と課題

【担い手など】

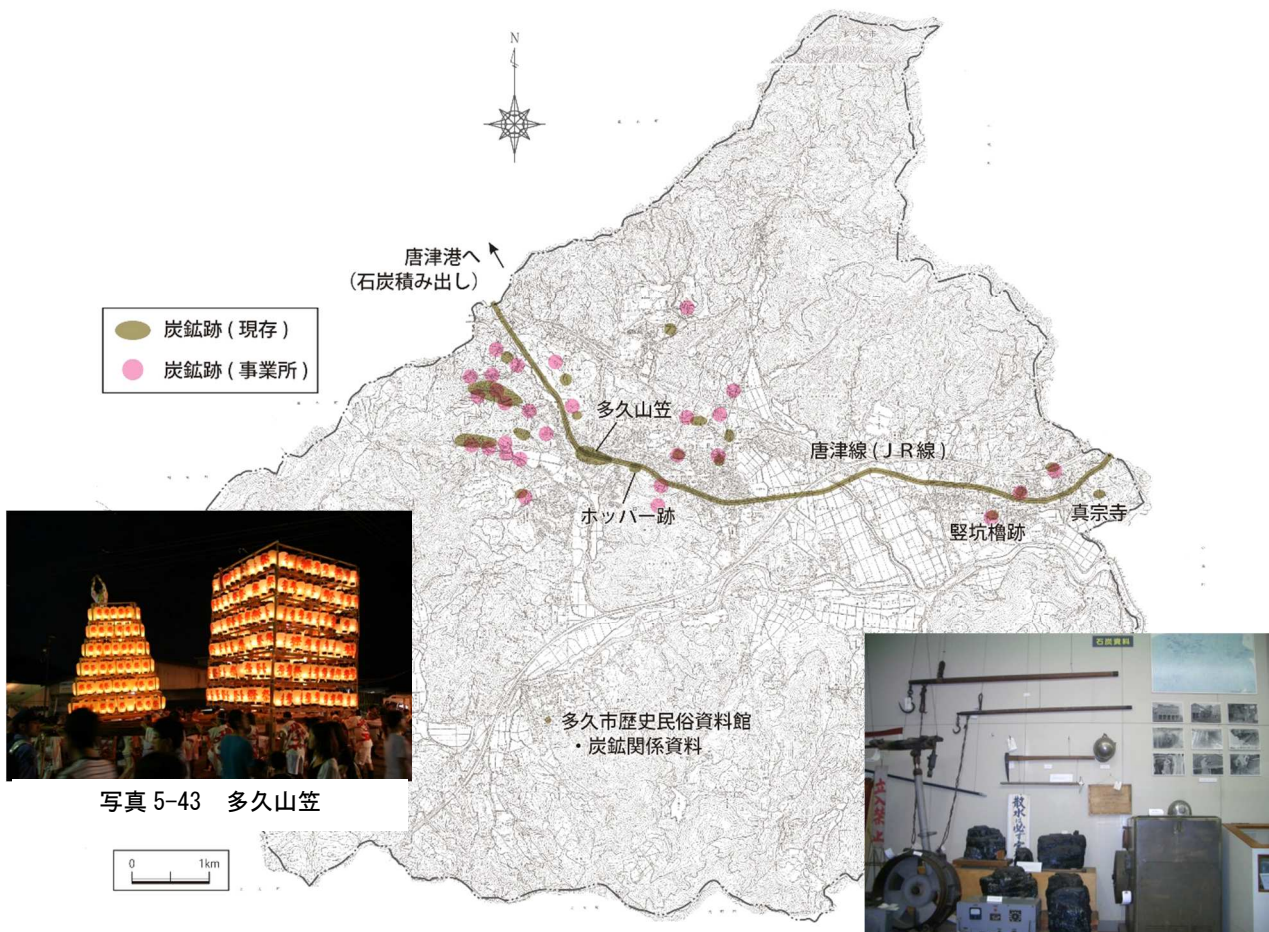
炭鉱関連では、その地の所有者が担い手であるが、積極的に保存・活用しているとは言い難い。

【公開と情報発信】

炭鉱関連の資料は、多久市歴史民俗資料館に保管され一部は公開されている。炭鉱関連遺構は保存が進んでおらず、現状でそのまま放置されているか、あるいは解体されているものも見受けられる。炭鉱の歴史を表した写真集「懐かしの多久の炭鉱写真集」（平成 27 年）や、「多久の炭鉱」（平成 29 年）が刊行されている。

【課題】

炭鉱跡地は、民間によって様々に利用されているものの、再開発の中で失われていく炭鉱の遺構をどう保存していくかが課題である。



資料 5-8 炭都・多山笠と近代関連文化財群の分布

写真 5-44 炭鉱関係資料
(多山笠歴史民俗資料館)



航空写真 (昭和 40 年)



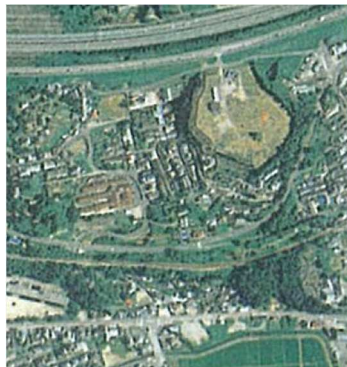
航空写真 (昭和 23 年)



写真 5-45 ホッパー跡と JR 唐津線



航空写真 (平成 18 年)
多山笠上空より東を望む



航空写真 (平成 10 年)



写真 5-46 炭坑跡